



平成29年5月26日
佛教大学附属幼稚園

道のまぶしさ

園長 藤堂俊英

アジサイの季節になると、おや！こんな所にいつの間に！と姿を現すのがカタツムリです。西平あかねさんの絵本『かたつむりぼうやとかめばあちゃん』は、背中に殻のおうちを背負ったカタツムリぼうやと背中に甲羅を背負った亀ばあちゃんが、マイペースで一日を楽しく過ごすお話です。新美南吉の『でんでんむしの悲しみ』は、背中のおうちに自分だけが悲しみを背負っているのではないことを、お互いが悲の器を背負っていることを、そして悲しみが共感の大地となることを気づかせてくれるお話です。

カタツムリの呼び名とその名の由来についてはいろいろな説があります。「カタツムリ」は笠つぶり、渦つぶり、片角振りなどに由来するという説。後半の「つぶり」というのは古語で貝を意味する「つび（海螺）」のことだそうです。「デデンムシ」は子どもたちが殻から出る！出る！とはやし立てた「出ん出ん」に由来するという説。「マイマイ」は子どもたちが舞え！舞え！とはやし立てたことに由来するという説。「蝸牛」は動作や頭の角が牛を連想させるからという説など、語源説はさまざまです。

まどみちおさんには「デデンムシ」という次のような詩があります。

きみは デデンムシ ひっそりと 雨戸をわたっている
どこかの淋しい国へ 逃げてでも行くように
だが きみはいま 必死で横断中なのだ
はっぱ 一まい つゆ 一しずくない この垂直の砂ばくを
アンテナ高くおしたてて 新しいオアシスの探検へと フルスPEEDで のろのろと
いま きみの中で きみの社会と理科と 算数と図工と体育たちが
どんなに目まぐるしく 立働いていることだろう
教えてくれ ミスター・フルスピード・ノロ きみの行手が近づくだけずつ
きみの後ろへのびていく きみの道のまぶしさを
きみの勇気の光なのか 天からのくんしょうなのか

私たち大人目からすれば、子どもたちの歩みはスピーディーには映らないかもしれませんが、しかし子どもたちの集団生活の中での成長をよおしく見れば、その歩みはまどさんが表現するようにフルスピード・ノロとでも言えるかもしれません。「…ちゃん！いつの間にそんなことができるようになったの！」という驚きは、その子の後ろに伸び行く道のまぶしさを感じさせてくれます。工藤直子さんの『のはらうた』には、かたつむりでんきちの「あのね ぼく ゆめのなかでは、ね ひかりのように はやく はしるんだよ」という自慢ばなしがあります。成長の道は自分で切り開くしかない道です。私たちは子どもたちが夢をふくらませながら切り開く道を、まぶしき勇気の光を通して見ることが出来るよう、励まし見守って行きたいと思えます。